顕彰芭蕉翁



鶴鳴や（つるなく）
其声芭蕉（そのこえ）
やれぬべし
芭蕉

第103号　令和8年8月

名品解説　巌谷小波（いわやさざなみ）筆「鬣（たてがみ）を」俳句自画賛



巌谷小波筆「鬣を」俳句自画賛

鬣を振ればちり来る桜かな　小波（さざなみ）

「日本のアンデルセン」と呼ばれる巌谷小波（一八七〇～一九三三）が、華やかな装飾をまとった馬の絵を描き、自らの句を添えた作品です。

小波は、児童文学者、また俳人として明治期から昭和初期にかけて活躍しました。巌谷家は代々近江の水口藩の藩医で、父の一六（いちろく）は貴族議員も務め、書家としても有名でした。小波も医者になることを望まれていましたが、父の期待に反して文学の道をめざすことになりました。

明治二十年（一八八七）、十七歳のときに、尾崎紅葉らが活躍する硯友社に入り、小説などを発表するようになりました。ここで出会った尾崎紅葉とはのちに俳句結社紫吟社を創立し、親しく付き合うことになります。二十五歳のころには雑誌『少年世界』（一八九五年創刊）の主筆として博文館に勤め、創作のお伽話を発表し、小波のところには多くの文人が訪れ、「木曜会」というサロンが形成されるようになります。その様子が小波自身によって『小波身上噺』（一九一三年）に書かれています。

何分毎日出勤の身の、ゆっくり話す間が無いので、遂に木曜日の晩だけを、此等の人々の為めに割いて、文芸講話の時間に当てた。（中略）週に一度の会日には、互ひに作物（さくぶつ）を批評したり、文芸を談じたり、古書を研究したり、また、俳句を作ったりした。

このような、小波の多彩な文芸活動は、お伽噺と絵と俳句を融合し一つの作品とした「お伽俳画」を生み出し、人気を博して、日本絵本の創始者とも位置付けられるようになりました。

なお、本作品は、現在開催中の芭蕉翁記念館企画展「俳句と絵のであうところ」（令和八年八月三十日まで）にてご覧いただけます。さまざまは想像を膨らませながら、是非ご観覧ください。

（伊賀市文化振興課学芸員　高井悠子）

巻頭句解説

元禄２年（1689）、「奥の細道」の旅の途中、黒羽（栃木県大田原市）のあたりで詠んだ句とされています。元禄７年に完成した紀行文『奥の細道』には掲載されていませんが、一緒に旅をした曾良の記録に伝わっています。鋭い鶴の声のために、植物の芭蕉が破れてしまったのだろう、という意味で、旅先で絵に書きつけた当意即妙の技が光る句となっています。

顕彰芭蕉翁　第103号
編集・発行／公益財団法人　芭蕉翁顕彰会／〒518-0873　三重県伊賀市上野丸之内117の13／電話0595・21・4081